オプション教材ピラカンサ　暗唱長文集

●暗唱の手順　１日分

・１日目は、まず、1の文章を３０回音読します。最初の数回はゆっくり正確に「てにをは」などを間違えないように読みます。
　正確に読めるようになったら、ある程度早口で棒読みで、句読点などであまり息継ぎをせずに読んでいきます。
　イスにきちんと座って読むと読みにくい場合は、歩き回りながら読んでもかまいません。
　お母さんやお父さんは、読み方の注意などは一切せずにただ優しく褒めるだけにしてください。
　１５回ぐらいでもう空で言えるようになることが多いと思いますが、できるだけ３０回続けて読んでください。
　なぜ回数を決めて繰り返すかというと、「覚えられたらよい」という目標でやっていると、暗唱の教材が難しくなったときに、「難しいからできなくなった」ということになりがちだからです。「決まった回数を繰り返す」という目標でやっていると、難しい教材になっても同じように暗唱ができます。
　３０回音読しても暗唱できない場合は、もう１０回音読してください。
　これでその1の文章が暗唱できるようになります。
　それでもできない場合は、暗唱の自習はいったん終了してかまいません。また機会を見てやっていきましょう。

●暗唱が難しいときは

　暗唱のような短い時間の学習は、夕方にやろうとすると忘れてしまうことがあります。また、毎日同じようにやらないとできるようになりません。できるだけ、朝ご飯の前などに、家族のいる中でやるようにしましょう。
　そして、暗唱を毎日やるのが難しい場合は、暗唱の自習はせずに、読書の方に力を入れていってください。

●暗唱の手順　１週間分

・１日目に、1の文章を暗唱できるようにします。
・２日目は、2の文章だけを同じように３０回音読し、暗唱できるようにしておきます。
・３日目は、3の文章だけを同じように３０回音読し、暗唱できるようにしておきます。
・４日めは、1、2、3の全部通して、１０回音読します。すぐに暗唱できなくてもかまいません。
・５日めも同じように、1、2、3の全部通して、１０回音読します。
・６日めも同じように、1、2、3の全部通して、１０回音読します。
・７日めも同じように、1、2、3の全部通して、１０回音読します。すると、1から3の全部の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の手順　１か月分

・１週目に、1から3の文章を暗唱できるようにします。
・２週目は、もう1から3はやらずに、今度は4から6の文章を暗唱します。
・３週目は、同じように、7から9の文章を暗唱します。
・４週目は、1から9の文章を全部通して、毎日４回ずつ音読します。
・すると、１か月で1から9の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の活用

・暗唱のコツをつかむと、自分の好きな本の１部を暗唱したり、英語の教科書を暗唱したりできるようになります。また、覚えるつもりがなくても、物事が頭に入りやすくなります。

●より詳しい説明は

　より詳しい暗唱の仕方は、「暗唱の手引」（http://www.mori7.net/mori/mori/annsyou.html）をごらんください。

1 孔子は、日常生活のこまごまとしたことをよく知っていた。それを見た弟子が感心すると、孔子は、自分は貧しかったから何でも自分の手でやらなければならなかったのだと言った。政治改革を目指した孔子は、結局政治の分野では大きな業績を上げることができなかったが、子弟教育の分野で後世に残る足跡を残した。**2** それも、孔子がバランスのとれたゼネラリストとしての力を持っていたからだろう。しかし、今日、そのようなゼネラリストが日本の社会にいるかというと心もとない。ゼネラリスト不在の社会というのが、今日の日本の問題だ。

3 では、その原因はどこにあるのだろうか。第一に考えられるのは、現代の社会が孔子の時代に比べて、社会制度の面でも、科学技術の面でも、巨大化、複雑化が増していることである。そのため、一人の人間が全体を幅広く把握することがきわめて難しくなっている。**4** 例えば、原子力発電所の事故があったときに、いろいろな専門家がそれぞれの立場から意見を述べたが、それらをまとめるゼネラリストの役割を担う人はほとんどいなかった。あとから次々と指摘されたずさんな管理の仕方を見ると、当初から原発という巨大なシステムの全体像を見通せる人がいなかったらしいことも明らかになった。**5** 巨大化に対応するだけの広い視野を持つ人がいないまま、細分化された場所で専門家がばらばらに仕事をしていたというのが実態に近かったようだ。

ゼネラリスト不在の第二の原因は、社会の安定と成熟に伴い、世襲化の傾向が増してきたことが挙げられる。**6** 政治の分野では、全くの新人が、地盤や看板や特別の知名度なしに当選することが難しくなっている。更に、世襲を有利と感じる一種の利権集団が形成され、それが外部からの新規の参入を阻むために、選挙の制度や法律を複雑にしている面もある。**7** 世襲化の弊害は、生まれつきその分野しか知らない視野の狭い人材が育ってしまうことにある。政治家という最もゼネラリストの資質が要求される分野で世襲化が進めば、その弊害は更に大きいと考えられる。

8 確かに、現代の複雑化した制度や技術を運用できるのは、専門的に養成されたテクノクラートだろう。スペシャリストがそれぞれの専門の分野にいるからこそ社会はスムーズに動く。しかし、専門家の横軸が広がるほど、それを縦に統合する強力なゼネラリストが必要になる。**9** 「群盲象をなでる」という言葉がある。象を説明するだけであれば、さまざまな専門家が自分の立場から象を解釈しているだけでも問題はない。しかし、象使いが生きた象をコントロールするとき必要なのは、細部の解釈の積み重ねではなく、象という大きな全体像の把握なのである。**0**

（言葉の森長文作成委員会　M）

1運動会に、もし競争という要素がなかったら、盛り上がらないことは確実だ。オリンピックは参加することに意義があると言っても、実際に参加賞しか出なかったら、やがて誰も参加しなくなるだろう。2このように、競争には人間を熱中させる力がある。競争によって社会は進歩してきた。競争がなくなったとき、社会も人間も衰退の道に向かったという例は、歴史上枚挙にいとまがない。3しかし、この万能に見える競争が、現代の日本の社会では、多くの問題を引き起こしている。そのひとつが、社会における格差の拡大だ。競争によって勝ちと負けを分ける仕組みは、日本の文化にはなじまない面がある。

4では、競争という仕組みがこのように支配的になったのには、どのような原因があるのだろうか。第一に考えられるのは、これまでの日本の社会に、やはり競争を人為的に制限する歪みがあったからだ。5談合という言葉には、悪い響きがあるが、配慮や思いやりという言葉で表されれば、自然のものとして受け取ってしまう風土が日本の社会にはある。しかし、弱者に対する配慮のつもりが、やがて強者の既得権の保護になってしまう例は多い。6防ぐ道は、本人の自覚よりもむしろ、情報を公開する仕組み作りにある。

第二の原因は、グローバルスタンダードという名前で、日本の社会を世界の競争の基準に合わせることが当然のように思われてきたことだ。7「フェアな取引を」という言葉で要求されれば、「日本はアンフェアでいい」とは言いにくい。また、「評価は能力主義で」と言われれば、「日本では能力は関係がない」とは言えない。このようにして、競争が無条件に善であるかのような風潮が醸成されてきたのである。8いったんある空気が形成されると、すべてその空気で判断してしまう傾向が日本の社会にはある。

確かに、日本には切磋琢磨という言葉もある。競争というものの価値は、先人も認めてきたのである。9しかし、切磋琢磨という言葉には、自己を向上させることに力点を置いた響きがあるのに対して、競争という言葉には、他人を蹴落としてでも勝てばいいのだという自己本位の響きがある。今、日本の社会に必要なのは、協調の精神に裏づけられた競争、言い換えれば、切磋琢磨のように日本文化になじんだ競争だと言えるのではないだろうか。0

（言葉の森長文作成委員会　M）

1 日本の高校生で、物理を学ばない生徒が七割もいると言われている。文系を選択すると、理科や数学の授業は大幅に減るからだ。逆のことは、理系の選択者が文系科目を学ばないことについても言える。

2 柔軟な頭脳で多くの知識を吸収できる時期に、狭い選択科目だけに集中し、せっかく幅広い教科を学べる機会をみすみす見逃がしていることは、本人にとってばかりでなく、社会にとっても大きな損失ではないだろうか。3 しかも、その狭い選択が、物事を深く知りたいという熱意からではなく、勉強の負担を減らしたいという怠惰から来ているとしたら、問題の根は更に深い。

では、現代の日本の、特に教育の分野において、幅広い教養の価値が顧みられないのはなぜなのだろうか。4 その原因のひとつは、大学入試制度にある。少子化の流れの中で生き残りを図る大学の中には、受験生を集める必要から試験科目を大幅に減らすところがある。そのような大学入試が増えれば、当然受験生もそれに合わせて楽な勉強をするようになる。5 その結果、現在、大学によっては、入学後の大学生に高校の授業の補習を受けさせるところも多い。しかし、もともと楽な選択を考えて入学した学生が入学後に突然学習意欲に目覚めるとは考えにくい。

6 しかし、大学側がそのような入試をするのにはやむを得ない面もある。すなわち、原因の第二は、高校までの教育が既に、子供たちに幅広い教養を身につけさせることを目的にしたものではなく、いかに効率よく大学に合格させるかという近視眼的なものになっているところにある。7 高校からすれば、原因は科目数の少ない試験をする大学にあり、大学からすれば、原因は幅広い教養を問う試験を行えないような高校までの授業にある。その間に立って、一見楽をしているように見えて実は貴重な青年時代に頭脳を鍛えられない高校生こそが最大の被害者なのだとも言える。

8 確かに、専門を深めることは大切だ。問題は、専門の力さえあれば、教養は二の次だと考えてしまう発想にある。時代を切り開くような創造は、多くが、異質な分野との接触によって生まれた。

9 専門と教養は対立するものではなく、互いに力を与え合うものだ。物理も、化学も、日本史も、世界史も、十割の生徒が学ぶのが本来の姿なのだということを忘れてはならない。0

（言葉の森長文作成委員会　M）